

## 第十節 工・鉱業

### 一 鉄工所

奄美大島は終戦とともにアメリカの軍政下に入り本土から隔絶されたため、食糧品をはじめすべての生活物資は不足し島民は自給自足を余儀なくされた。本土で、または兵隊で技術を修得した人たちが帰郷し、かじ屋、鉄工所などの新設が目立った。主な鉄工所は次のとおりである。

向井鉄工所	和泊	山田鉄工所	和泊
名村鉄工所	和泊	梶原鉄工所	
山本鉄工所	和泊		

### 二 戦前戦後の澱粉<sup>でんぷん</sup>工場の概要

太平洋戦争に入り島の重要な換金作物であるゆり球根

が輸出禁止になった。和字出身の前久茂氏はゆり代金にかわり島を潤す換金作物はないかと考えた末、それは「年間通じて収穫できる甘藷を原料にした澱粉工場である」との結論に達し、直接農林省特産課に出向いて許可を取り、昭和十七年十三万円で建物機械の据え付けをして操業を開始した。当時年間処理量は甘藷八十万貫であった。また従業員も最盛期には八十名雇用していたとのことである。しかし戦争が激しくなり甘藷の植え付けが思うようにいかず原料不足をきたした。そこで沖永良部島に豊富にあるソテツの幹を原料にした澱粉工場に切り替えた。

澱粉の販売は和泊町産業組合（現農協）を通じて大島郡の連合会に納入し、販売は連合会が引き受けていた。島民はその澱粉を買って主として味噌をつくり、また焼酎の原料としても使用した。あまりおいしくはなかったが戦争中または終戦後の食糧不足の時代であり島の人々から喜ばれた。また極端に食糧事情の悪い大島本島の人たちには特に喜ばれた。終戦前後の食糧難時代の大島郡民に食糧を供給した功績は大きい。